



ICU OpenCourseWare の振り返りと今後の展望

ICU OpenCourseWare の潜在性を理解する / M. ウィリアム・スティール	1
OCW 活動報告 / 作前 陽子・浅野 あす香	4
Google Classroom を使ってクラス運営に要する時間を節約する / ガイ・スミス	8
新任教員紹介	
川本 隆史 9 / 矢内 賢二 9 / 李 勝勳 10 / オリビエ・アムール=マヤール 10 / アレン・キム 11	
FD セミナー報告	
Open Education: How We Got Here / 小林 智子	12

❖ ICU OpenCourseWare の振り返りと今後の展望

ICU OpenCourseWare の潜在性を理解する



M. ウィリアム・スティール
献学 60 周年記念教授

ICU OpenCourseWare のページを訪れたことがありますか。ICUのウェブサイト内にある「教育の特長」および「学部」のプルダウンメニューから簡単に見つかります。リンクも覚えやすいです (<http://ocw.icu.ac.jp>)。そこには通常の授業約90科目 (英語科目30以上)¹⁾とオープンキャンパス等のモデル授業、特別講演のほか、コンサートの様子を収録したビデオ映像があります。どうぞ、ご覧になってください。

OpenCourseWareのサイトは、2013年にICU献学60周年記念事業の一環として開設されまし

た。ただしその起源は、ICUが日本オープンコースウェアコンソーシアム (<http://jocw.jp/>) に加入した2008年に遡ります。当時学部長であった私は、2002年に始まったMITの初期のオープンコースウェア・プロジェクトに参画された宮川繁教授と面会する機会に恵まれました。宮川教授に触発されて、私たちもICUでオープンコースウェアの取り組みを始めることになったのです。

当時のOCWプログラムは、”Open ICU”、略してOICUと名付けられました。2008年OICUの「使命」には、次の通り書かれています。「自由で開かれた知識探求は、リベラルアーツ教育に対するICUの強いコミットメントを反映している。ICUの教育を広く世界に開放することで、今日の世界が直面している複雑で多岐にわたる課題への取り組みを共有したいと願っている。ICUは、これらのコースが学びたいと思っている人々の創造的か

1) 2015年12月1日現在の授業ビデオ公開数

つ批判的な思考を刺激することを願っている²⁾。「開かれた自由な」学習の場を生み、世界に広めようとするこれら初期（2008～2010年）の試みについては、現在、その一部がOCWのウェブサイト上に保存されています。

宮川教授は、2012年に60周年記念教授としてICUに戻り、初期のOCWプロジェクトの復活に寄与しました。教授は日比谷学長とのインタビューの中で、オンライン教育という成長分野にICUが参加したこと、そして特にICUのリベラルアーツ教育の使命「国際性」に関するコースの公開を重視したいと希望を語りました。このインタビューの様子は、ICUのOpenCourseWareのサイト (<http://ocw.icu.ac.jp/ocw-interview/>) に掲載されています。実際、ICUのOCWプログラムは以下の目標を掲げて開設されました。

- 1) オープンコースウェア・プロジェクトは、特にリベラルアーツの領域で情報共有化、学習、討論にグローバルな規模で寄与することにより、ICUがその使命を果たすために有用な場となる
- 2) オープンコースウェア・プロジェクトはファカルティ・ディベロップメント（FD）に貢献する。授業科目の設計と運営が著しく改善され、教育の向上、学習の向上につながる。
- 3) オープンコースウェア・プロジェクトはICUの世評を高める。ICUの教育の質が将来の学生を含む多くの人々の目に見えるようになる。オープンコースウェアは強力なPRツールであり、良質の学生をICUに招くために役立つ。

ただし、これらの目標がどれだけ達成されているかを検証する必要があります。

ICUのOCWは誰が見ているのでしょうか。統計

データによれば、ICU OCWのサイトには世界50カ国から毎月100件程度のアクセスがありますが、圧倒的多数は日本国内からのアクセスであり（2015年4～11月に12,072件）、日本以外では米国（612件）、英国（68件）、カナダ、香港、中国（54件）からのアクセスです。このサイトをもっと魅力的なものにするにはどうすれば良いでしょうか。

ICUの教職員はICU OCWで提供されるFDの機会を生かしているのでしょうか。私たちは自分自身を見つめ、自分たちの教え方を論評するだけでなく、他者から学ぶこともできるはずですが。

高校生たちはこのサイトを見てくれているのでしょうか。有望な入学志望者をICUに惹きつけるためにOCWが役立っていることを裏付ける証拠はあるのでしょうか。

私は、学習と教育の向上を図るテクノロジーの教育力を信じているからこそ、これらの疑問を投げかけるのです。ICUのOCWは良く機能していますが、改善の余地はあります。

OCWで私自身が担当するクラスによるいくつかの批判的な提案は、ICU OpenCourseWareの潜在力を知るために役立つでしょう。私は2008年にOICUプログラムに参加し、2つの科目（「日本現代史」および「日本研究：歴史、美術、文学」）を用意しました。60周年記念教授として教えた科目はいずれもビデオ収録されていますが、残念ながら、今OCWのウェブサイトでアクセスできるのは「近代日本とICU」だけです。そこで、以下に私の提案を述べます。

- 1) 選ばれた講義だけでなく、できるだけフルコースを収録、公開すること。2013年に私が教えたある科目には、ビデオ映像が2本しか含まれていません。2014年のクラスでは

2) 私の寄稿した初期のICU OCWの試みについての記事: 「OICU—開かれた、自由な大学」 FDニュースレター、13巻1号、2008年10月、9-10ページ

- 11本ありますが、2015年は（今のところ）1本のみです。全体をビデオで聴講できる科目は稀で、場合によっては一部の特別な講義だけが含まれています。
- 2) 科目情報をもっと充実させる必要がある。例えば、私の「近代日本とICU」については、単に「本科目は、ICUの歴史を近代日本史の文脈の中に位置づけることを目指す」としか書かれていません。この科目では、明治時代から続くキリスト教的精神による高等教育の歴史を辿りつつ、特に終戦直後に創設されてから現在に至るICUの歴史に着目するものです。この科目に注目する学生諸君にはこの程度の情報でも十分かも知れませんが、全世界の聴講者にはより詳細に説明する必要があります。
 - 3) シラバスへのリンクを提示し、学生たちが授業科目の構成、学習目標、課題、評価方法、それに必要な資料や推奨図書などのリストを把握できるようにすること。各講義で取り上げるトピックごとの課題やリンクについての詳細など、重要な情報が欠落しています。私は、学生諸君が授業の準備に利用できるように、そうしたリンクをMoodleに掲示しています。この種の情報はOCWのコースでも提供できるはずです。講義ノートも役立ちますが、もちろん、それにはOCW向けに授業科目を準備している教員から積極的なインプットが無ければなりません。
 - 4) ICUの教職員とOCWのスタッフは、MITが提供するOCWコースを参考にするべきです（例えば、Anya Zilberstein教授による“Food in American History”の講座: <http://ocw.mit.edu/courses/history/21h-s01-food-in-american-history-fall-2014/index.htm>では、詳細なシラバス、資料と資料を購入または閲覧できるサイトへのリンク、課題に関する詳細情報、学習に役立つ関連資料へのリンク、資料をダウンロードするためのオプションなどの情報が提示されています）。
 - 5) 最後に、ICUはedX (<https://www.edx.org>) に参加したほうが良いと思います。これは、世界で70以上の大学のOCWの資料を集めた非営利のオンライン学習コンソーシアムです。京都大学と東京大学はチャーター・メンバーであり、最近は大阪大学もメンバーとして参加しています。edXのメンバーになれば、ICU OCWの授業科目を「全世界の意欲ある若者たち」に容易に届けることができるはずです。
- ICUのOCWは良いスタートを切りました。ウェブサイトには既に100名近くの教員の授業科目が公開されています。ICU OpenCourseWareの潜在力をフルに生かして「人間」についての学びを世界中に推進するために、共に働きましょう。それは、リベラルアーツ教育機関としてのICUの目標達成につながるのです。
- （日本語訳：CTL 担当）

OCW 活動報告

作前 陽子・浅野あす香

学修・教育センター デジタルメディアサポート室

はじめに

ICU OpenCourseWare (OCW) は、2012 年秋学期から授業収録を始め、3 年ほど経ちました。これまではコース紹介を優先して 1 コースにつき 1~2 回程度の講義ビデオを公開してきましたが、2015 年秋学期には先生方のご協力によって 4 コースをほぼ全回分収録、現在公開に向けて編集作業を行っています。

この 3 年間で収録にご協力頂いた先生方は約 100 人、まず ICU の特徴ある授業ということで、「一般教育 (GE)」担当の先生 (主に専任教員) にご協力を頂き、6 割以上の授業を収録することができました。多くの先生方のご協力とご支援に感謝します。



(現在の ICU OpenCourseWare トップページ)

I ICU OpenCourseWare の変遷

OpenCourseWare (OCW) は、2001 年にアメリカのマサチューセッツ工科大学 (MIT) でスタートした、授業コンテンツの公開事業です。OCW の取り組みは、その後世界の大学に広がり、2006 年に日本オープンコースウェア・コンソーシアム (JOCW, http://www.jocw.jp/index_j.htm) が設立され、ICU は 2008 年 6 月に加盟しました。

・2008 年加盟当初

Open ICU Courses(OICU)として、学内サイト(w3)においてコンテンツを作成。

コンテンツはメジャー科目 (8 コース)、入学前教育プログラム等で、講義シラバス、レクチャーノートなどがメイン。



(Open ICU Courses トップページ)

・2011 年 8 月-2012 年 3 月
デジタル・コンテンツ検討チーム(教員 1 名、スタッフ 2 名)が組織され、今後の活動について検討、授業のビデオ収録、準備室の設置を提案する報告書を提出。

・2012 年 7 月
デジタルメディアサポート準備室が設置され、オープンキャンパスモデル授業等の収録実施。2012 年 9 月、ICU OCW として正式に一般教育科目 (専任教員中心に)、60 周年記念教授等の授業収録を開始。

・2013 年 4 月
ICU OCW サイト (<http://ocw.icu.ac.jp>) が正式公開。4 月の公開コンテンツは GE 科目 8、メジャー科目 7、大学院科目 1、その他特別講義、オープンキャンパスモデル授業 13 で、合計 29 コンテンツ。



(当初の ICU OCW トップページ)

・2014年9月
メジャー科目（主に基礎科目）を中心に収録を開始。2012年秋から2年間で、GE科目の公開数は27科目（GE科目の約1/3）となり、OCW公開コンテンツ数は約100。また、利用者に使いやすいサイトを目指しOpenCourseWareサイトをリニューアル。

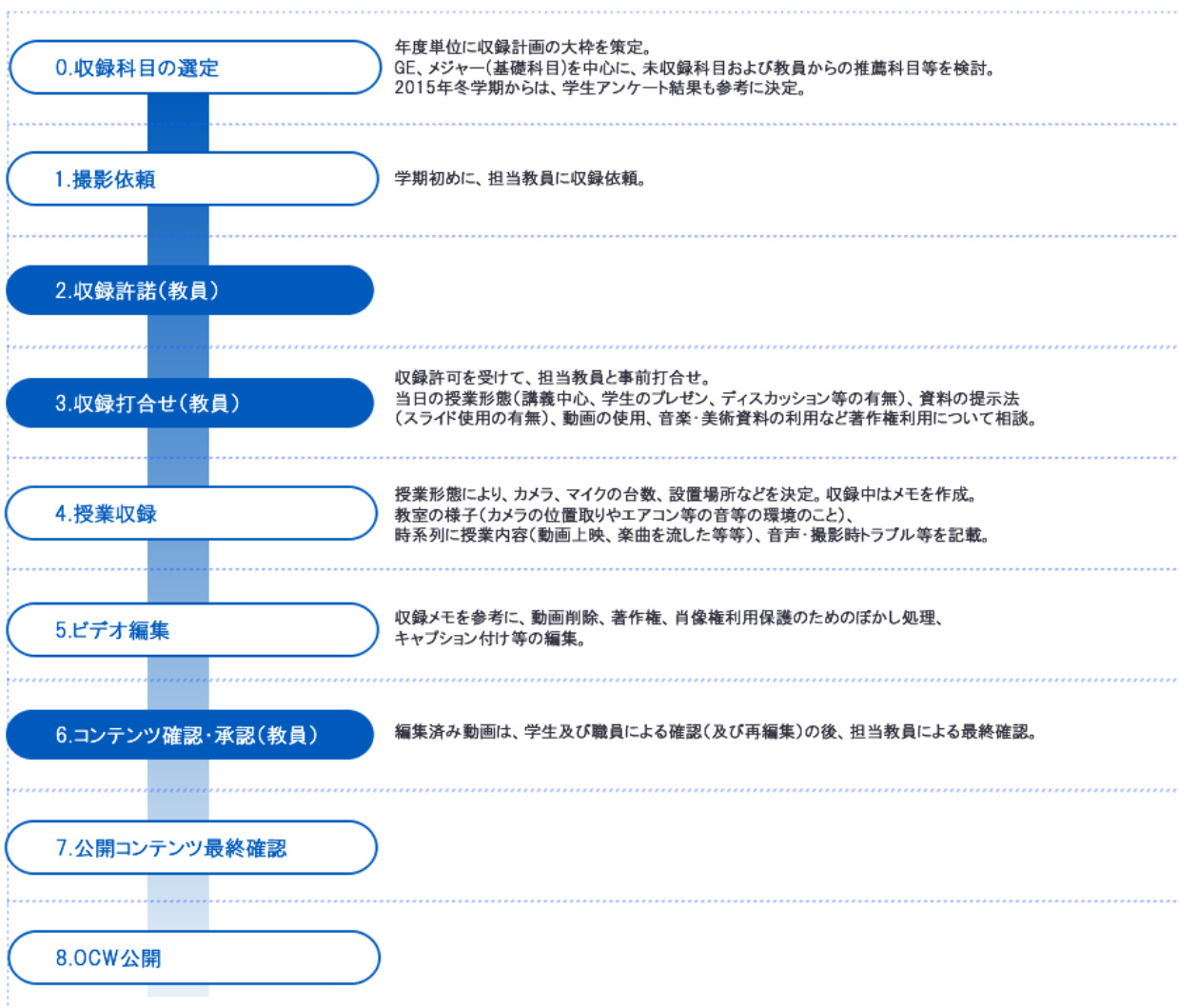
・2015年12月現在
通常のICUのコース約90（GE科目42、メジャー科目35、ELA4、JLP1、WL2、大学院2）、その他特別講義、オープンキャンパスモデル授業等81で、約170コンテンツを公開。約1/3が英語開講の授業、講演等。

<今後の収録計画（2016年度以降）>

- ・OCW公開後4年間で120コース、英語開講コースはその1/3程度を収録。
- ・収録科目を限定（2科目程度）し、コース全般を概観できるコンテンツ数の増加。
- ・各メジャーの基礎科目を今後2,3年で最低一科目収録、公開。

II OCW 授業収録から公開まで

現在、ICU OCWは次のような流れで、「収録から公開まで」作業が行なわれています。教員との打合せ、動画編集の最終確認作業は職員が行ないますが、通常の授業収録、動画編集は学生スタッフが中心となっています。編集では著作権利用についての判断・対応が難しく、処理に時間が掛かります。教室内での使用は問題ないが、OCW公開は二次利用となり、教育目的利用として許可されない場合が多いからです。



III ビデオ収録

現在、授業の収録はカメラ2台および収録用マイク1台を基本に考えています。「引き」、「寄り」とカメラアングルを変えたり、撮影トラブルへの対応でもあります。大教室での授業、学生プレゼンテーション、ディスカッション、学生の演習実習等が多い授業には、効果的です。

2013年春にMIT 宮川繁先生が顧問として就任され、音声収録の改善を行い、ICレコーダーに別録を始めました。無線マイクでの収録も行ないましたが、録音が途切れる等の現象が多く出始め、現在はピンマイクから直接ICレコーダーに録音を行なっています。

2012年当初はカメラ一台での収録が多く、映像・音声トラブルで撮影した動画が使えないという状況もありましたが、現在はだいぶ改善されています。

外部講師の講演会等の場合には、授業撮影・公開許諾確認書に署名を得ている。また、学生発表が主体の収録の場合には、当該学生より肖像権利用について承諾を取っている。

IV ビデオ編集

OCWに公開されている授業ビデオには、大きく分けると以下の2つのタイプがあります。1) 授業をほぼそのまま編集し、公開しているロングタイプ、2) 一回又は複数回の授業を短く編集したダイジェストタイプです。

また、編集では2台のカメラ画像を切り替えて使う場合、1台のカメラ映像(スライド映像等)に2台目の映像を組み合わせる等、授業により編集方法も変えています。

1 ロングタイプ

講義全体を概観できるように、収録した動画をほぼそのまま公開しています。

板書、スライド説明等が多い講義形式の授業に向いています。

2 ダイジェストタイプ

1回または複数回の授業を1本にまとめ、その授業の雰囲気、構成等を伝えます。

特に、著作物を扱う授業や学生のプレゼンテーションやディスカッションの多い授業では当該部分を削除し、補足説明をキャプションでつけています。また、教員による授業内容説明の別撮りをつける場合もあります。

編集例)

- 1) ディスカッション部分を短く削除し、キャプションで対応



- 2) 2台のカメラ映像、スライド資料と教員の組み合わせ



- 3) キャプションで授業内容を説明



- 4) 複数の教員による授業を短くまとめて編集



V OCW 利用者の実態調査

1 Google Analytics を使用し、2013.04.01 から 2015.11.30 の期間で調査しました。アクセス解析は「総アクセス数」「地域」「人気のコンテンツ」「デバイス」などです。(2015年11月基準)

(1) 総アクセス数
開始時は月に 800 程度だったが、現在は月に 1800 程度のアクセス。

(2) 地域
大部分が日本だが、次いでアメリカ、ロシア、ドイツ、韓国、中国が多く、アフリカ大陸を除くほとんどの国からのアクセス。

(3) 人気のコンテンツ
トップページのお勧めコンテンツからのアクセス、高校生対象ページからのアクセスが多い。また、英語ページへのアクセスも上位。

(4) デバイス
Desktop からのアクセスが多く、60%程度を占めるが、モバイルからのアクセスが増えており、30%となっている。

2 ICU OCW サイト公開後、はじめてアンケートを学部生に対して実施しました。

(1) 実施概要

目的：ICU OCW 認知度および収録希望科目
期間：2015年9月18日-30日
回答者数：186名(2300名中)

(2) 結果

1) 認知度：「利用したことがある」、「知っているが、利用したことはない」と答えた学生は、約 40%

2) OCW の良い点は：

- ・誰でも実際の授業を見ることができる
- ・入学前に見て受験の動機、モチベーションに繋がった(入学前教育、オープンキャンパスで OCW 紹介)
- ・興味のある教授、分野の授業を履修する前に見ることができる
- ・授業で聞き逃した点を確認できる、試験前に復習できる

3) OCW に公開してほしい授業は？

- ・ICU の特徴的な授業：キリスト教概論
- ・歴史学、カルチュラルスタディーズ
- ・復習の手助けとして：英語開講の授業、スピードの速い授業、数学、政治学、板書の多い授業など

4) 興味のある分野

メディア・コミュニケーション・文化、心理学、教育学、人類学、国際関係学、社会学、ジェンダー・セクシュアリティ研究、歴史学、経済学、経営学、グローバル研究、開発研究、他

VI 最後に

ICU OCW 公開の目的は、一つには ICU のリベラルアーツ教育の実際、さまざまな形態の日英二言語による主体的学修がどのように行なわれているかをわかりやすく外部の方たちに伝えることです。と同時に、ICU の教員及び学生への教育・学修支援に貢献することを目指しています。特に、2年次の終わりにメジャー選択を行う現在の教育システムでは、履修コースの決定、メジャーの選択において重要な情報源になる事を目指しています。今後、公開コースを増やしていき、ICU OCW がさまざまな場面で利用されることを願っています。

追記：

JOCW が加盟している国際コンソーシアムは、2014年5月に、Opencourseware Consortium から Open Education Consortium へと名称を変更しました。

<http://sites.uci.edu/opencourseware/blog/2014/05/12/opencourseware-consortium-becomes-open-education-consortium/>

❖ Google Classroom を使って クラス運営に要する時間を節約する

Gmail の「More」のドロップダウンメニューにある「Classroom」という面白そうなアイコンをクリックしたことはありますか。

春学期、ICU の GAFE (Google Apps for Education) に含まれるこの新しいアプリケーションを試してみることにしたのですが、大変感銘を受けました。日常のクラス運営でかなりの時間節約になるうえ、学生向けの課題を作成する上で、大いに役に立つことが期待できるからです。Classroom では、Google Docs、Google Forms、Google Groups、その他の GAFE アプリなどが一元的に管理できるようデザインされています。その結果、簡単にクラスを作成できるし、各アプリは教員のニーズに充分適応しており、インターフェースも使いやすいです。Google Classroom はますます便利になり、教員の実務上のニーズに合致したものになろうとしています。

初めてクラスを作成する時には、Google Classroom でコードが与えられるので、学生たちは Google Apps で Classroom アイコンをクリックしてコードを入力するだけで、ただちにクラスの一員になれます。Classroom でのクラス運営体制は 3 ページに分かれています。まず、「Stream」のページでは、教員が告知、課題、質問フォーラムを通じてクラスの学生と対話することができます。「Student」のページでは、学生の情報を保管できます。「About」では、シラバス（講義内容）を掲示できるほか、重要な教材を保存できます。

Google Classroom で特に有用な 2 つのアプリを紹介します。

- *Create Announcement* を数回クリックすればクラス全員と連絡を取ることができます。（*Student* のページでは、特定の学生に連絡できます。）
- *Create Assignments* では、提出期限が自動設定されるオンライン課題を掲示できるので、提出された課題の回収、返却、チェックに要する時間を大幅に削減できます。課題を作成するとき、課題作成画面で、リンクや Google Docs、ビデオ、その他の資料ファイルなどを追加するオプションもあります。これにより、まず学生向けの課題作成作業が簡便化され、課題設計に際して創造性、独創性を生かせる度合いが大幅に増します。例えば、ある課題で学生たちにテンプレートの使用、ウェブページの参照、



ガイ・スミス

特任講師

リベラルアーツ英語プログラム

ビデオ閲覧、*Create a Question* 機能によるオンライン討論への参加を求めることができます。しかも、1 人の教員が複数のグループを指導している場合でも、各グループに告知や宿題を発表することができます。

Google Classroom では、固有の Google+ コミュニティをアクティブに活用できます。コミュニティからフィードバックやリクエストを発行すれば、Google Classroom 開発チームからクイックレスポンスが返ってくるため、教員にとって Google Classroom が一層使い勝手の良いものになります。新しいアプリには、例えば、新しい教員を招くときに使う *Invite a Teacher* (教員招聘) があります。このアプリを使えばコースを担当している教員が病気等で交代が必要な場合にも、別の教員をクラスに招待して引き継いでもらうことができます。Google Classroom の Google+ コミュニティは、何が必要なのかを遠慮なく Google に伝えることができ、機能向上に向け働きかけ続けていきます。今後数年間で、間違いなく Google Classroom は教員にとって今まで以上にアクセスしやすく有用になり、カスタマイズも容易になるはずです。

GAFE で Google Apps の Google Classroom を見たことがない方は、ぜひともアクセスしてみるべきです。比較的無理なく使い方を覚えられるし、Google Classroom Help Center にアクセスすれば十分な支援を得られるはずで、独創性やオリジナリティのある課題設計ができるだけでなく、GAFE のツールを利用すれば教員の業務時間が年間 52 時間も短縮し、資料の作成や準備に多くの時間を割くことができると Google は述べています。

(日本語訳：CTL 担当)

〈関連リンク〉

ICU Guide to Google Classroom フォルダー
(今のところ英語版のみ)

https://drive.google.com/open?id=0Byutw_6FyNgmdlpyUTBLTVc0bWM

❖ FD セミナー報告

Open Education: How We Got Here

講師：宮川 繁（献学 60 周年記念教授，マサチューセッツ工科大学教授）

日時：2015 年 6 月 10 日（水）12:50-13:40

会場：本部棟 206 会議室

学修・教育センター(CTL)が設立され、初めての FD セミナーでは、オープンエデュケーションについて、CTL の顧問である宮川繁先生にご講演いただいた。

2001 年にマサチューセッツ工科大学(MIT)が発表した、すべての授業の講義資料をインターネットで無償公開するというオープンコースウェア(OCW)のプロジェクトは、オープンエデュケーションのはじまりの一つと言える。その 10 年後の 2011 年に、スタンフォード大学が、「人工知能入門(Introduction to AI)」の授業をオンラインで提供すると発表し、これが MOOCs(Massive Open Online Courses)として急速に世界に広まっていった。教材を提供する OCW と、授業、教育を提供する MOOC、オープンエデュケーションにはこの 2 つの流れがある。

MIT の OCW では、コースによっては、ほとんどすべての講義のレクチャーノートが掲載され、Creative Commons ライセンスで提供されているので、誰でも自由に、ダウンロード、配布、また改変して利用することもできる。また、中には宿題やクイズ、その回答などが公開されているコースもある。MIT がなぜ OCW を始めたかについて、当時の MIT の学長の「お金は分けるとなくなってしまうが、知識を分けると増える」¹⁾という言葉は印象的であった。この理念は、MIT の大学のミッション、「新しい知識を作る、シェアする、保存する、世界の大きな問題に当てはめる」を反映している。オープンコースウェアを進めていくには、大学のミッションそのものを反映していなければならない、と宮川先生は強調されている。



宮川繁 献学 60 周年記念教授

MOOC については、ハーバードと MIT 共同で edX から提供された"Visualizing Japan"²⁾について紹介された。宮川先生は、この MOOC と同時に、並行して MIT の通常の授業も担当されたが、その授業で、学生に宿題としてあらかじめ MOOC のビデオを見てもらい、クラスではディスカッションを行うという形式を試されたところ、リーディングアサインメントに比べ、短い(かなりよくできた)ビデオの方が、はるかに学生の知識の定着率が高く、効果があったという。また、反転授業では学生たちの発言量、活気が全く違うことを実感され、これを一度経験すると伝統的な授業には戻れない、とおっしゃっていた。ちなみに、Web で公開するビデオは 10 分でも長く、2 分から 6 分ぐらいが理想的で、学生たちはビデオを 1.5 倍、人によっては 2 倍速で見ており、聞き逃したところは、巻き戻すのではなく、字幕でカバーしているそうである。

最後に、高校には通学せず、ほとんどの教育を MOOC で受講し、15 歳で MIT への入学が決まったという高校生の話を紹介された。オープンエデュケーションの発展により、今後は、入学試験の方法もさらに多様化して行くであろう。

- 1) MIT の Vest 学長の言葉 (Charles M. Vest, former president, MIT, 2002)
"If you share money, it disappears, but if you share knowledge, it increases."
- 2) Visualizing Japan のコースはアーカイブとして、ビデオ全てが公開されている。
<https://www.edx.org/course/visualizing-japan-1850s-1930s-harvardx-mitx-vjx-1>

ICU の OCW についても、今後の可能性、新たな活用方法などについても考えさせられたセミナーであった。

小林 智子
学修・教育センター

※FD セミナーの講演映像は icuTV および ICU OCW で公開されている。

<http://icutv.icu.ac.jp/workshop/>

http://ocw.icu.ac.jp/sl/sl_20150610/

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

ILC-212 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan

Phone: (0422)33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp
